

倫理法人会では、経営者が自己革新を図りつつ、健全な企業の繁栄を実現させることを目的の一つとしています。自己を革新するとは、変えられる面、変えるべきところは時代や世の中の状況に応じて、どんな変化、改善させていくということです。その勘所は、経営の基礎となる型（形）、あるいは道という先人たちが守ってきたものに足場を置くことです。伝統にもとづいてこそ、改革や革新が成就されるのです。今週は「名代の倫理」と題する文章から伝統に纏わる箇所を一部抜粋して、経営者に有益な実践について、お伝えします。

我国には「襲名」ということがある。父の名を子が継ぎ孫が継いで、何代とつぎつぎに継いで、「八郎左衛門」とか「四郎」「次郎」とかいう名が、代々つがれて行く。これは、前代の人格も財産もゴツソリとそのまま受け継ぐ、名代となる意味を持つ。そこに一代限りでない、著しい伝統の倫理があらわれた。

これが芸道の場合には、非常に高い意味がある。團十郎を嗣ぐと、團十郎の心境に躍進する（或いは、躍進した心境において襲名するのである）。かくして、一連不断の文化の伝統が累進累加の形をとる、いちじるしい事実である。その最高峰は、天津日嗣（※皇位の継承のこと。引用者注）の倫理である。こうした事実、我が民族が築き上げた倫理の偉観である。

「名代」の要は、絶対無条件の尊敬、帰命にある。何等の私心もなく、頭を下げるにある。相手に没入する、とけこむ。だから、入



良き伝統を引き継ぐ 名代としての倫理実践

れ代わるのである。生きながら、人格が、芸能が、入れ代わる。小さい自己が解けて、新しいものが入れ代わる。

〔実験倫理学大系〕丸山敏雄著／新世書房
今年の五月に十三代目市川團十郎を襲名予定だった十一代目市川海老蔵さん。平成十六年までは七代目の市川新之助という歌舞伎名跡でした。歌舞伎役者が襲名披露の場で名乗りを行なうことが名代の倫理と言えるでしょう。仮に一代が三十年つとめたとして、十三代目を継ぐということは、三百年以上の祖先の人格・功績を一身に背負うという覚悟の表れです。それは十二人の歴代先輩達が築いてこられた型を模倣すること、当代自身が磨いてきた芸の力とが相俟って、新時代のオリジナリティを引き出すことにつながります。古典の歌舞伎のみならず、現代劇にも出演し、高い評価が得られるのも、名代としての実践に裏打ちされてきたからと言えるでしょう。

老舗では、経営者が何代にも渡って「〇〇左衛門」や「〇〇兵衛」と名乗り、世襲的に経営を続けて、着実な発展を遂げているのも同様です。

歴史や伝統のある企業であるかないかに限らず、私たちは父母をはじめ、技術を教えてくれた先輩や上司、現在もしくは過去に勤めた会社の社長に至るまで皆、模倣の対象として存在します。一途に「敬い」という潤滑油を注ぎ、教えてくれた事柄を模倣する時、時空を超えて、今の自分に大きな力を創出してくれるはずですよ。